

## 北京騷擾 その二

中島八十一

六月四日の學會開催に合はせ、ツアー會社の募集に應じ、旅程を組み上げ、往復の航空チケット、ホテルを決めたり。しかるに中國國內は四月以來の民主化運動の高まりいよ當局の限界に達したれば、五月半ばに戒嚴令の發令を見たり。日増しに中國渡航の厳しき募るばかりに、渡航一週間前に至りて米國政府は米國一般人の渡航禁止を宣言したり。はて、いかにせんとて、この種の事情に詳しからん大叔父に尋ねたるに、かかる事項は外務省に訊くべしの一言で終れり。學會參加者の中にありて余は若輩なれば、何人も行かじと言はざるにずると北京向け飛行機に乗りたるは生來の樂天的性質にもよると言ふべし。家を出づる折、妻の腹を内より蹴るは、その月の末に生まれ來るはずの子なり。

いづれに聞きたりや中國人留學生余を訪ね來りて北京空港に家族待てばみやげを渡すべしと小さからざる箱を余に預く。胸騒ぎを覚え、直ちにその場にて開封するに底より日本圓の札束詰めたる封筒現れり。残りの雜品のみ持参を約せり。

6月3日、晝過ぎ北京空港に著けり。かの留學生の大丈夫なりの一言で請け負ひしみやげの箱を大事に抱へ入國審査に向へば、初老と30代の女性二人の大音聲にてナカジマと叫びつつ余の一行に走り寄りたり。これかと思ひ、余も自ら名乗り上ぐるに、件の箱を突き出したれば挨拶も早々にひったくるが如くに受け取りそのまま消えたり。箱を開くる折の失望の相貌いかばかりか。かくなる出來事は入國審査以前のことなり。空港より一行に割り當てられたる専用バスに乗りて市内のホテルに向ふ。邦人にとりては何事も廣大に見ゆる現地の平原の中、兩脇を並木に圍まれたる道路は自動車専用道路にはあらず、舗装こそなされたれ、乾きたる畑より飛び來りし細かき土に一面まみれ居り。かの並木の樹木はいづれの種なりや、楡なりしか。

かくしてホテルに著き、∞階の實に廣きツインの部屋に入り、ともかくも一息吐けり。ややありて同行者より電話にて、夏至近く、日暮れ遅ければ、中に入らずとも見るのみにて價值ありと天壇に誘ひたれば即座に諾<sup>うべな</sup>へり。

ロビーに向けエレベーターを降りる際、さらに上層階から降り來たれる中國人男性二人組英語にて聲を掛く。自らは香港の會社の者にて今より出國したらん、汝復路のチケット持ちたるやと。續けて、もし持たざれば手配可能なりと。見ず知らずの人なれば、唐突の提案に應へやうもなく、當然復路のチケット所有せりとのみ短く答へり。二人組は顔を見合はせ、にやりと笑ひてそのままになれり。

日本人五人は同行者の一人の知人なる中國人一人の先導にてタクシーニ臺に分乗し天壇に向ふ。そも北京に梅雨はありや、あるいは未だ到來せずやと思ひつつ、いささか暑き季節の中、この歴史的建造物を外周を經巡りつつ見學せり。時刻の故なるか他に客は少し。人民服を著る者ありて、同行の中國人言ふに地方よりの訪問者なりと。別に胸前にピントのいかにも大なるリボンを付け居る女性もあり、昭和のそれも舊き時代におかっぱ頭の少女の髪に挿せる飾りを思ひ出させり。やや日の陰りつつある中、待たせ置きしタクシ―にて豫約濟のレストラン目指し天安門に向ふ。

(令和四年六月十二日受附)